

転ばぬ先の杖を次から次へと渡すんじゃないやなくて
子どもたちがつまずいてもいい。信じてあげる

明けましておめでとうございます。
新春特別企画として、昨年10月に加西市制55周年の記念事業で「日本酒コンサート」を開催させていただいた歌手の加藤登紀子さんと民輪めぐみ教育長の二人に、これから必要とされる人材や教育の在り方などについて、語っていただきました。



加藤登紀子さん × 民輪めぐみ教育長

「百万本のバラ物語」から見る教育のあり方

加藤 今日は教育がテーマという事で早速なんですけど、最近書いた『百万本のバラ物語』にチエルノブイリの被災地に行った時の話でね、原発近くの街で被災して故郷を無くしてしまっってキエフに避難した人たちのことなんですけど、街から逃げた人は5万人くらいと言われてます。
民輪 加西市の人口より多いですね。
加藤 お母さんのお腹の中で被爆した子どもたちもいて、その一人の子が私に言ってくれた言葉があるんです。（本を差し出して）

いじゃないの。書家の榊莫山さんは、四角の中に収まってる字なんて一文字も書かなかったです。

加藤 そうです。わざわざはみ出します。
民輪 でしょう。この子はそういう力を持っているんだから、逆に四角の中に入れようとは思わないで欲しいという話をするんですけどね。学校の先生というのは、大切な子どもたちを預かっていて、危険を避けるためにどうしても前例というものを大切にします。でも、この子たちは20年後に社会に出て自分たちの道を確認しなきゃならない。前例の安全主義だけでは未来がつかめない。教育って子どもがいかに幸せになるかということだと思っから、その幸せの捉え方を変えましょう、と今言っているところ



たみわ めぐみ
1951年加西市生まれ。京都女子大学文学部卒業後、出版社を経営しながら、一時代を画すことになる週刊の分冊百科『世界の美術館』や『地球旅行』『日本の街道』などを企画、編集。世界を駆けた。月刊誌『料理王国』の編集長なども務める。2020年7月1日付で、加西市初の女性教育長に任命された。

民輪（文章を音読）「この世に生まれてきたら、土に木を植え、しっかりと子供を産み育てること、それが人間としてなすべきことなんです。という言い伝えがこの国にはあります。科学技術はもう十分。それを進歩させることより、私たちはもっと生きることを勉強しなきゃいけないと思う」。
加藤 今日私が言いたい全てかなと思えて。この子が12歳の時の言葉なんです。
民輪 12歳の子が言ったとは思えないですね。私は加西市初の女性教育長なんです。ある時、発達障がいの子を育てているお母さんに出会ったら、「うちの子は、四角の中にちゃんと入る字が書けないんです」と嘆かれるんです。で、私は、い

なんです。

加藤 私たちの世代は不思議なくらいに、自由さと生きることに対する熱気があるよね。それは生まれた頃に何もなかったからなんです。何かがあるようになったらワクワクし、何もない時でも平気だった。

民輪 そうそう。元氣すぎるかもしれないですけどね。今の若い人たちにとっては（笑）

加藤 私の頃は身体や心身に障がいのある子たちもみんな同じクラスにいましたから、みんなで守らなきゃならないっていうそんな感じでした。でも今はそういう子たちを育てるだけ別に育てようとする。これは教育の効率化だと思う。効率ではなく目の不自由な人がいたり、体

新春 対談

プロフェッショナルって、目の前でコップが倒れた時
水の流れていく、その行き着く先が読める人



かとう ときこ
1943年ハルビン生まれ。1965年、東京大学在学中に第2回アマチュアシャンソンコンクールに優勝し歌手デビュー。1971年「知床旅情」はミリオンセラーとなり、以後、多くのヒット曲を世に送り出す。また、地球環境問題にも取り組み、自然環境の現状を音楽を通じて発信している。夫が手掛けた千葉県「鴨川自然王国」を子供達と共に運営し農的暮らしを推進している。